

JAPANESE EVANGELICAL MISSIONARY SOCIETY

948 East Second Street
Los Angeles, CA 90012-4317
Tel: 213.613.0022
E-Mail: info@jems.org
Web: www.jems.org



JEMS - 日本語部 支援 : NICHIGO-BU SUPPORT

- 日本語部とスタッフのためにお祈りいたします。
- 日本語部の働きのために 毎月 \$ _____ 捧げます。(_____ 月 _____ 年まで)
- 今回 \$ _____ 捧げます。

Name _____ Phone _____

Address _____ City _____ State _____ Zip _____

E-Mail _____

チェックのあて先はJEMSとお書き頂き、Memo欄にNichigoとご記入下さい。

JEMS P.O.BOX 86047 Los Angeles CA 90086-0047 電話: 213-613-0022

※オンライン献金 <https://jems.networkforgood.com/projects/10875-minako> もご利用頂けます。



編集後記

西原 黎子

淡い陽光が降り注ぎ、春が間近なことを知らせてくれる。あと一か月あまりでイースターがやってくる。なんか小さなワクワク感を抱くことができ嬉しい。オミクロン株が急速に広がって以来、私も友達たちも必要な買い物以外は家に籠ることが多くなった。そんなある日、友だちがランチに行きたいとコンタクトを取ってきた。4人ほど集まり、アウトドアーで食事を共にすることになった。誘ってきた一人暮らしの彼女は、いろいろな思いに迷い、苦しみ、出口が見つからずアップアップの状態になってしまったようだった。数時間、他愛ない話をし続けて、彼女は「ああ、すっきりした。心の中が空っぽになった」と言って、喜んで帰っていった。私たちも彼女の思いを共

有できて、嬉しくなった。その2,3日後、私はあるニュースレターに、牧師であり精神科医である先生の言葉を見つけた。「苦しみは誰かと分け合おうと半分になります。何かわからないけれど、もやもやと苦しい。そういう思いをひとりで抱えこまずに、誰かに打ち明けてほしい。ひとりではなく、一緒に生きていく、それがとても大切なのです」。

私はどんな時にも、誰かにすつと寄り添える者でありたいと思う。祈りをもって向かい合いたいと思う。イースターの喜びも分かち合っていきたいと思う。





走るマリアたち

関 真士師 ホノルル・キリスト教会牧師

最近、走ったことがありますか？ ジョギングやジムでの運動以外に、走る予定はないけれども、思わず走り出してしまったという事はあったでしょうか。

ある日の長閑な夕方のこと、私は犬の散歩をのんびりとしていました。するとスマホが鳴りました。「先生、今どこにいますか？」「犬の散歩中ですが」「先生、みんな待ってますよ!」「やっば…。見事にミーティングを失念していました。あわてて走り出しました。

日曜日の朝、イエスの葬られた墓に行ったのは、マグダラのマリアと「もう一人のマリア」(おそらくイエスの母マリア)でした(マタイ28:1)。御使いは、マリヤたちに「そして、急いで行って弟子たちに伝えなさい。『イエスは、死人の中からよみがえられました。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。そこでお会いできます』と。いいですか、私は確かにあなたがたに伝えました。」(28:7)と告げました。

この御告げを聞いたマリアたちは「彼女たちは恐ろしくはあったが大いに喜んで、急いで墓から立ち去り、弟子たちに知らせようと走って行った。」(28:8)のです。

走るマリアたちの姿を想像してみてください。イエスの母マリアは、50歳近くであったと思われる。当時の50歳は、かなりの高齢者であったでしょう。そのマリアが走ったのです。息を切らせながら、汗を流しながら、髪を振り乱して、ハアハア言いながら走ったのです。

なぜマリアたちは、走ったのでしょうか。御使いは「急いで行って」と告げました。だから走ったのかもしれませんが、しかし、それ以上に、母マリアの脳裏には、目の前で憤死した、愛するイエスの姿が焼き付いていた

ことでしょう。そのマリアにとって、「イエスは、死人の中からよみがえられた。…そこでお会いできます」という御告げは、どれほどの「喜び」だったことでしょう。その喜びがあまりにも大きかったので、一刻も早く弟子たちに伝えたいと走り出したのでしょう。

哲学者ニーチェは「神は、死んだ」と言いましたが、今の時代、まるで神が死んでいるかのように、虚無に陥り、孤独と絶望の淵の中に佇んでいる人がなんと多いことでしょうか。しかも、ただ佇むだけではなく、その孤独と絶望の淵に人々を道連れにしようとする、とんでもない事件が後を絶ちません。

しかし私たちは、この現実を前に、なす術もなく立ちすくみ、ただ溜息をついてうつむく者たちではありません。私たちには、御使いがマリアたちに「伝えなさい」と告げたように、私たちには伝えるべきことばが委ねられているのです。

「神は、生きている。イエスはよみがえられた。そこで会える」と、この希望のことばを私たちは持っているのです。思わず走り出しくなるではありませんか。

それでは、私たちにとって「そこで会える」の「そこで」とは、どこでしょうか。

それは、キリストの教会です。確かに教会は、主に呼び集められ、主の愛を受け取り、主を愛し、互いに愛し合う集まりです。そこにイエスはご自身を現わしてくださるのです。教会に行ったらイエスに会えるのです。

そこで私たちは、しばし立ち止まります。私たちの集う教会は、「その通りです」と言える教会もあれば、言いきれない状態にある



教会もあるでしょう。この世との関わりの中で苦闘している教会もあれば、内側の問題で苦闘している教会もあるでしょう。「ここに来たら、主が生きておられることが分かります」と堂々と旗を掲げることに躊躇する教会もあるかもしれません。

しかし、それでもなお、私たちは伝えるのです。主の復活を告げ知らされた弟子たちは、ペテロをはじめ、みんなイエスを捨てて逃げてしまった者たちです。もちろん復活の信仰も持っていませんでした。だからこそ、この弟子たちにイエスの復活は伝えられたのです。

私たちは、弱さと欠けを持った者たちです。それでもなおイエスは私たちを呼び集めてくださいました。赦しを必要とし、癒しを必要とし、愛を必要としている者たちです。だからこそ、私たちは、ただ一点、今も生きておられる主を求めているのです。

私たちの完全さが、主が生きておられることを現わすものではありません。弱く、欠けだらけの者だからこそ、ただただ主を求めているのです。その切なる求めの中に、主はご自身を現わしてくださるのです。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」(マタイ5:3)と記されている通りです。

だから私たちは、伝えるのです。神は生きておられる、救いはある、ここに来てくださいと招くのです。いえ私たちの方から走って行って伝えるのです。

マリアと共に、私たちが走りましょう。

宣教の原点は、真の友となること

ロビソン 満基 JEMS宣教師



宣教師になって早14年。宣教師として、東京都と岩手県で計8年半、教会開拓アシスタントとして働き、2019年には神奈川県教会開拓チームに子ども4人を連れて遣わされましたが、状況的にその地で子供を育てながら働きを続けて行くのが難しくなり、2020年から東京西部の教会開拓チームに移りました。さあ新天新地で仕切り直し!と思った矢先のこと。引越してすぐ、今度はコロナが大流行し始めました。人々が教会に集まる礼拝・イベントができず落胆しましたが、それを契機に、神様に新しい視点を与えられることになりました。

コロナ禍の日曜朝、ZOOM礼拝を終えて家族で散歩に出ると、週末にしかできないスポーツや家族団らんなどのプライベートを楽しむ人々の姿が町の至る所に見えました。従来、教会という建物からの『いらっしゃい伝道』だけでは届かない沢山の人達に出会い、身近に寄り添う必要を思い知らされました。考えてみたら、イエス様は、いつも色々な所に出かけ、人々と出会う公生涯でした。ペテロ、ザアカイ、マタイ、サマリアの女など、彼らが初めてイエス様と出会ったのは、彼らの生活の場であり、イエス様が招いた特別な場所(礼拝堂など)ではなかったのです。

一方、2019年から始まった教会開拓は、コロナ騒動2年の間もほぼ毎週日曜に教会に集まり続けてきました。コロナ禍に始まった20人ほどの小さな教会ですが、聖書に関する質問が自由・活発・大胆に飛び交う雰囲気の中、学生から主婦まで、求道者が次々と与えられ、受洗に向けた学びも始まりました。夫は説教やディスカッ

ションを通して、私は求道者との個人的な時間を通して、彼らのイエス様への道を見守っている大事な時期と感じています。

教会開拓と共に、昨年準備し始めたWEBマガジン「ゆりすずめ～聖書と共にあゆむ暮らし～」も祈りを必要としています。コマーシャルよりユーザーの口コミ評判の方が物を言う時代。日本で育ち日本でクリスチャンとして生きてきた者として、聖書とあゆむ暮らしの豊かさを、クリスチャンとして歩む方々や聖書に興味のある方、家庭生活に悩む方に寄り添う形で、生の声として紹介するサイトの必要性を強く感じ、昨年頃から少しずつ準備してきました。今年4月に末っ子が幼稚園に入園するので、本格始動も間近です。ゆくゆくは、読者とライターが繋がるオンラインの「座談会」「聖書を読む会」「子育てサロン」など、交流や学びの場も展開していけたらというビジョンも与えられています。

イースターのこの時期、いつも思い出す光景があります。数年前、教会でエッグハントをやった時のこと。小学生は卵を隠すチーム、ちびっこは卵を探すチームに分けました。必死に探し回るちびっこ達。その後ろから、あっちにあるかもよ～!とそれとなく卵の場所を指し示す小学生達。「あったぞー!!」と卵を高くかざすちびっ子の満面の笑顔と、共に喜ぶ小学生達の温かい顔。その光景は、まさに宣教の姿そのものでした。人間はみな生まれながらに、自分をまるごと受け入れてくれる居場所を探しています。先に本物の居場所を見つけた私たちは、他の人も見つけることができるように、何気なく、押し付けず、



でもわかりやすく、イエス様を指さす隣人として、友が救いを見つけるようお願いが添います。本当の居場所を見つけられた時の喜びは、卵を見つけ、あったぞー!と叫ぶ子どもの満面の笑顔のごとく、それは格別なもの。大切な友と、いつか共に大喜びする救いの日を楽しみに、今日もクリスチャン人口1パーセントの日本に生きる私たち宣教師のために、ぜひお祈りください。

WEBマガジン

「ゆりすずめ～聖書と共にあゆむ暮らし～」

<https://yurisuzume.com>



宣教紹介ページ・献金先

<https://jems.networkforgood.com/projects/10861>



神はこの小さな器を用いたもう

黒澤 倫子 Rise OC Church



最初の渡米は2009年、カリフォルニア州に赴任しました。結婚と同時に夫の駐在帯同としての海外生活が始まりました。海外経験もなく、英語も話せず、運転出来ず…。初めて尽くしの日々を何とか乗り越え生活も落ち着いた頃、徐々に私の中に空虚感と、それを埋めたい気持ちが生まれてきました。独身時代に仕事に追われ刹那的に過ごしていたものが、自分の奥深いところで、飢え乾きを覚えていた事にだんだんと気づかされていったようです。「人と繋がりたい」という一心で、誘いを受けた英語のバイブルスタディに参加するようになりました。その中で姉妹達の愛や私の救いへの祈りを感じつつ、聖書を読み進めるうち、過去の自分を彷彿とさせる「放蕩息子の喩え」を聞く事になりました。

大学時代に「放蕩娘」だった私は、両親の愛情を拒絶して家を飛び出し、音信不通になるという愚かな選択をしていた数年間がありました。無論その選びには多くの試練があり、最終的に私は実家に逃げ戻る事になるのですが、「こんな自分勝手な自分は赦されるはずがない」と恐れで一杯でした。そんな私に対し、クリスチャンであった母の応答は、まさに主が私達に示して下さった愛と同じものでした。私の全てを無条件で赦し

受け入れてくれた母の愛の深さが私の心に刺さり、同時に自分の愚かさ、罪深さも身に染みた苦い学びでした。この出来事が10年後にアメリカの地でみ言葉と結びつき、主が私に個人的に示して下さっている無条件の愛が「体験」として理解出来たのです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい(伝道書3:11)」というみ言葉が確信として、私の中に強く刻まれました。

私は救われ、日本へ帰国しました。やがて日本の教会で多方面に用いて頂くようになりました。「癒やしの賛美者」という召しも与えられました。病院や施設など主の癒しを必要としている場で訓練され、また最上の生きた供え物としての賛美をお捧げするよう霊的に整えられ、成長させて頂いたと思えます。音楽は人を癒やします。例え歌っているのが賛美でなくとも、伝え手が主に委ねて愛を流し出す時に、万能の主がいかにようにもそれを用いて働いて下さいます。苦しみや疲れの中にある方が音楽を通して安らぎ解放されていく。その奇跡を多くの現場で目の当たりにし、この小さな器の私でさえも、福音を伝える為に遣わされている1人なのだという自覚を持つようになりました。

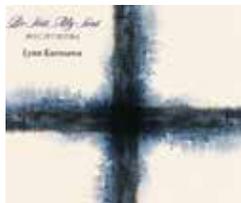
その後2018年に2度目のアメリカ駐在と

なり、オハイオ州からカリフォルニア州へと移りました。今日本への帰国を目前にして、駐在者ならではの目まぐるしい生活を送っています。同じ立場にいる者として、駐在者への伝道は大きな土壌であり、また救いは急務でもあります。慣れない土地、言語、習慣の中で、特に家族は本人の意志と関係のないタイミングで帯同している事が多いので、心身共に準備万端ではなく、また、日本での仕事や学校を一旦辞めざるを得ない為、それまで社会で見出していたアイデンティティが急になくなり、空虚感やストレスを覚える事が多いという現状があります。

実生活でも精神的にも助けが必要です。でもその助け手をどこに探したらいいのかわからない。そのような思いでいる家族に対して、教会が手を差し伸べる事がどれだけ大きな光になる事でしょうか！一方、数年しか滞在期間がない駐在者は、日々生き急いでいる一面もあります。滞在中にアメリカ力を堪能しようと毎週末旅行に飛び回る家族も多い中、彼らをいきなり日曜礼拝に誘っても実現はなかなか難しいのが現実ですが、その現状を切り拓く絶好の機会が、実はイースターなのではないかと私は思っています。

家族みんなで楽しめるアメリカならではのイベント、そんな緩い入り口がいいのです！そこで個人的に繋がる事、祈りつつ友人関係を深め、親身に助ける手を伸ばしていく事、その一つ一つに主の愛が現れ流れていく時、そこには確かに一粒の種が蒔かれていくのです。今この時期、大きなイベントが開催出来ずに悔しい思いをしているのはどこも同じでしょう。ただこれが逆にいいきっかけとなります。私は教会イベントに以前参加してくれていた他州や日本にいる駐在者ともオンラインで交流を続けています。そして私自身、これから帰国し、日本に戻った後の働きを、そしてアメリカで蒔いた種達のケアの為に、主に用いて頂く事を具体的に祈り求めています。

私に蒔かれた救いの種が10年かかってアメリカで花開いたように、主の駐在者へのご計画がどのように進んでいくのかを今から見るのが楽しみです！主に期待して祈りつつ…。



2022年1月17日より配信リリース(Apple, Amazon, Spotify, LINE Music)

JEMS 日本語部

コーディネーター 藤本 三奈子

お知らせ

第73回JEMSマウントハーモン修養会

マウントハーモンカンファレンスセンター: 37 Conference Dr. Felton, CA 95018

2022年6月26日(日)~7月2日(土)

朝の聖書講解講師: 関真士牧師 ホノルルキリスト教会 / 夜の集会講師: 修養会参加牧師

申込み: <https://www.mounthermon.org/events/jems/>

レッドウッドに囲まれた自然の中で、祈り、主と語らう。主にある家族と交わり、賛美し、礼拝する。豊かな一週間を共に過ごしませんか。皆様のご参加をお待ちしています。お問い合わせはminakoF@JEMS.orgまで

